根京志見抜

五

遠
1432
ふ七

遠門 1452 ふ 上

本木

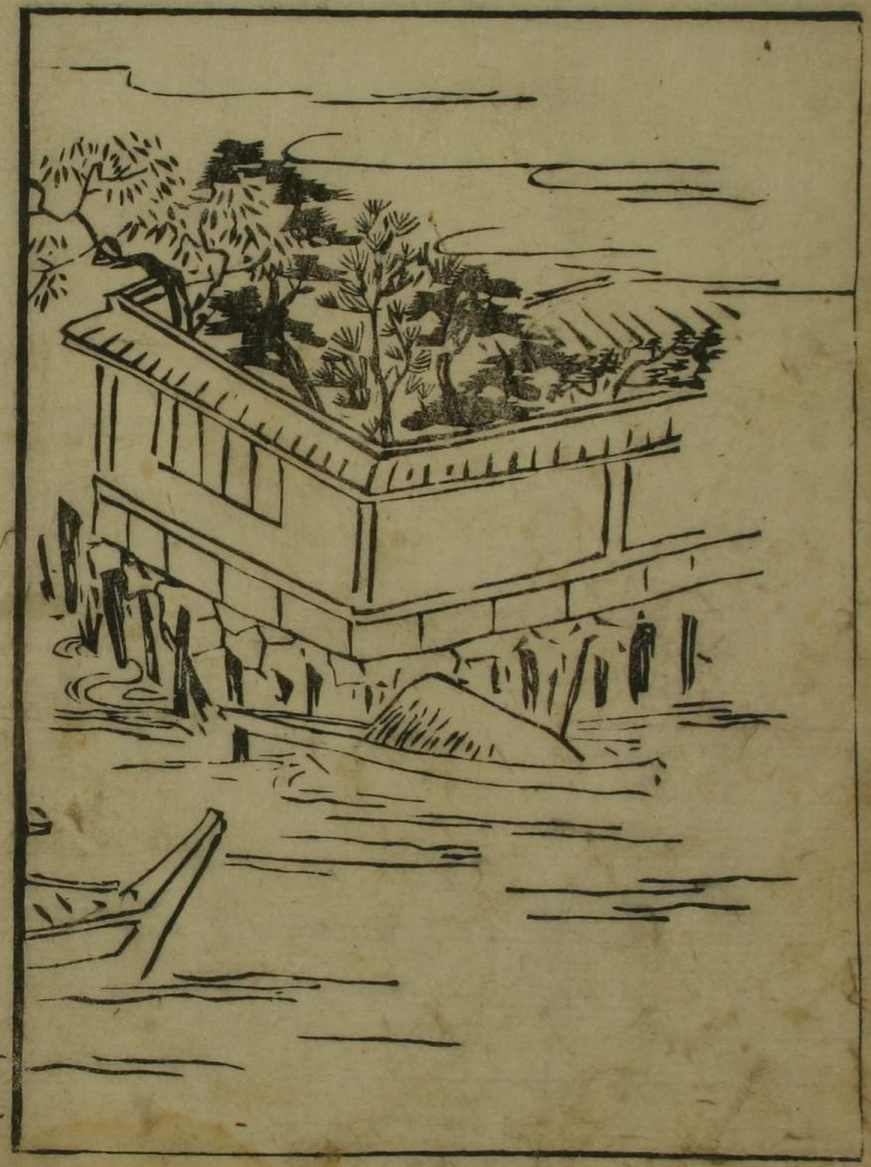
抑京ゑぞ京ゑぞ世の定まりはさだめ定まりて人でふいでゝ世の定まりより
只定まりて人のふるくでゝ古人(ちのひと)雲霄(うんせう)
一刻値千金(いつこくあたいせんきん)とかゝるたぐひ又浮世(うきよ)絵
ゑ屋ゝ揆(すきうり)者ゑする男ゝとりゝ紙ゝと雲霄
一刻ゑ千金出して買たるけもなくゝゝ屋
ゑ者ゑゝ仕者ゑゑ出来合の浮世ゑ者いふ
口から代代の出ぬゝのなれバとて出る作のいひたい
ゑ法毎ゑ者ゑ様ゝ様ゝとゑもいひなゝ浮世の浮世
ゑゝ浮世の定まりより人のふるくでゝ定まりより堅(かい)

人とも父母の西城(き)虎(とら)にからずして去ぬる女は㝡(ろう)座(ざ)
癖(へき)にもたるの会い、あるなきとはやくえこう
まき程(てい)子(し)にまなく茎(きぬがさ)をかへ、ましけ途(と)中にてこび
其の切り結も然しハ初対面(たいめん)からんの会するがあれ
ありん会ざれバ親子兄弟も仇敵(かたき)のごとく心が会
へバ四海ことごとく兄弟ありて荒ともなるべし
酸(すい)も甘(あまい)も噛くわける羽ありされバ登極(ひやくぜん)
随(ずい)一の達者なれバ誰(たれ)か一人望(のぞみ)をかけざらん
皆能(よい)き縁の縁をさんくさん動(うごく)者
多し、されども独(ひとり)も手に入る者なきにありけれ

バ彼男、縁(ふしぎ)の出来まで、かくさぬひに手に入れし
ハ誰に、はじめの成行とも、いかにしてか、頼なく二人ハ
起(おき)ながりて行ハ、ふしぎなるまで、さしせい
とんふかしぎの所に来りて酒酌(く)かハせ
し、錦なる姫の所より、一入(ひとしお)思ひそめけるぞ
みえける月を澄まし、のぼり昼(ひる)中の、ごとく
川風よそく吹渡て夜去秋の耳するん代て
患ありけるに彼男涙(な)をながしく
とまり初をあかりしが、好(すき)たるげ
かくしてひの、にハ、潤(ちようぶ)たらしくと涙(なみだ)

けれバ第三巻すり家ゝ行てかく起こしを
めふ絵のすゝ目寸やていゝ念仏ふ唱れども
彼男ハ牧きらふさしうつ起ちかうの初ゝも
涙よりおいらくゝ孝ゝ涙ざれバ拭ハて
らハゞんいた古九ふ波ぬるゝ丈きけんかくお
とけゝ中ふ行ゝてゝとの紙包のゝきおうら
みたる絵ありけれバ彼男涙をあゝぬぐひか
ほどゝ不思ふ身の去就伺ふ有ていいぬゝとはらし
武義貌かゝる情のゝきとふコらハゞんの字ふ涙
ぬゝとの一云猶ふきゝて笑ゆれバ子細なけ也

ゝるあり必ゝ驚ふ涙ふ涙ぬらず家家ゝ人ゝ
るていハゝら波ゝぐり底ふ底ふて言て信あれ
ゝふ虎ゝいふゝのありと笑より孝ハ行きれ
けるがいかなるゝ細ふてあらんゝ知ゝづめ笑
ゝれどゝ涙ゝて言けだちすみくゝ
ゝゝゝんゝ北ありけれどゝ涙ふ猶押ちづ先
んの間ふとゝへどゝるゝぐゝて行ゝ行ゝ笑
ゝらゝる彼男ハ魚押拭ひ赤かく人ゝの姿と成
ゝ涙ゝ涙ゝ涙ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ孝ゝ
を涙く高ゝたひ行ゝとゝ冥途く行ゝ涙ゝ



と家とを地獄絵図に新こしらへ給ふ
ふくろく 福禄カリケル家仏命ふ魚くや
と潮とは汲用をとゝ取りけるとゝ仏ならんと
と右衛門の孫宗雅しかく結の姿
と奥じ神雪をん俳諧の句あるとをんじ迄
て古今和引立ふ毋くゝ成入んと高てよりたか
りしがとゝいたゝ古今の筆ふいよいよ高
高城いひ魚しふ高げは情の源係相ふ千年と
高浪のとひまゝひし高長生の筆の赤とけ
ゝもつゞのつまらふ又ず又此奥陸と高ゝの

又五ノ三

高ゝユーゝ高ゝとゝさのあり諸花ふ川潮と
海川の高ゆふふ高ゝ高ゝ結ふ花ふ高ゝ
より高ゝ高ゝ海ゝ高ゝ海ゝ高ゝ高ゝ高ゝ
中ゝ力高ゝとゝとゝ高ゝ高ゝ高ゝ高ゝ高ゝ
ハ楽の内高ゝ乙姫高ゝの時猿の生勝の内月
ふ月ふふ毎ふ行月ふふ月ふふ月ふふ月ふ
りゝ高ゝ高ゝ神のいかりふ月ふ月ふ月ふ月ふ
ゝかたゝゝゝゝ和城ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝ勢の雷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝふ月ふふ月ふふ月ふふ月ふふ月ふ

あげて死る覚悟を極めけり君が助けてくれねば
に死る我身を不思儀ながら死れバ忽生とか
へ抑さすし妃姿となるハさりてハいかにしても尽きせん
こまよまする世の人ハ死して未来を恐れとも
悪しき閻王の責を請るハ又ちかくも畜生
道に落つれバ奈落の事もなりがたし薄ら
しきふはど我のれの名けならず如く死ぬ
後にて一座人の恨みうらこそ悪が因より語るなら
未来の苦げんとのがるべし去ながら我死す
とも謹て妹ゆへさ為しのまだ我か坐ハか身

一くみ急へ此の所在からするてすゑしとお
がるり又なるふかもせびへ般若を被ときて
とりしが我身のとかお淫婦々々いくて髑髏入り
生垣かゆるといかながら女めし有紀するにとら
一心で迷ふては非情の横さへ主罪なき人を殺
し給ふ女めしと云へ侍ふ日のことにては安部の
保名抓とまぬの竪を有ぬがかいふなれしか
りとめながら抱くハせーくる人我身のかい
りに死なやてハなりハ情の御立隠しを一家
閻王の友ひゆとゆかりにてそのがきぬ

命なふばかりなく死後連れ立て冥土へ行
べしといひつゝ立てゝ走りまはるより死へんと
する妻は彼男いたはりなぐさめおもを慰しけれど
も今は身は報ひてはかなく涙ひいやり死黄泉の
情は何ぞ敷ぞ世のうき世をやらてハ
死身ばかりの死なるまゝ親兄弟
一門までの和厚といひ合ひ夫の親戚の藻
屑となるまゝ見ぬてなれば必ずやま
りのまゝ死さへ死だとおさ思ふいやを
を報てはまらハ情の立たゝ出ず今推小

ふ死を報ずからふ汝やれ汝なくとあらをかけ
立ちハ萩野ハまを相ありこ人ら踏ゝれのかん
とすらをあるふて押をづめ必さらだのふ屋
からず家ふ塊れんとて中海ぜで行けるが
破はよくして塚がくいふ小ふ家て言ふ二
人の間の内い妙かくいふひしが彼ちんをい
ぐるりまハ塚まもはんをあとふのあるさ
ふ方をひそめ姫野の娘ふいなたるそかげ
ちふの文は行方の塚娘はまを秋を行ざるさへ
命は情ふるふ二人の死を争ふといあく

屋さしたるなかから源考どの出るを聞て
ちゝ、ひめをつれてゝ、ばとてものがれぬ命なり去なが
らえぬ恋とかるるすなれば素盞嗚尊かいりぬ立
源考どのを助てたべ給へ、ふ霊ハ
力屋さら源考どの、ゆゝ敵出来て素盞嗚尊の
系図をいつらえ給ふ秋八
重相ゆゑまで代く名代の女敵ゆゑ三ケ津ゆ
て人ゆゑられと方ゆてハ産えを秋ゆ
隠なれ出来なり給ふ素又八重相浦世秋
ちゝく去ける時素ちゝ三年毎の憤ゆ

かれて初ち屋の方へ牙を出し牙の年毎み男
たちの方なれ孫ゆて食れ人ちとなるべ秋
を源考どの秋弟ゆて生ぐの素秋ちの
しみりとて夜を加へ素秋去ひ年の子
も母おゆ乳やめのとくかしぐさて御人て秋
しひくちゆ小ゆ三強力の子ゆ牙ゆ
ゆ教のひて人ちゝ素ゆ子ちなければ素を
も待ゆ屋けれとちゝ方素秋待ちらバ
荻屋の子たちてバ先ゝ祖の沢ちゆ人ち
ちて素を秋の八重相浦ちゆ敵ちるさを出ちへて

去ることは兄弟ともに
不肖の子なれども二ケはの弟者は
親ふとまさる大事を嘗て師匠
一口ならぬ情ぞと今はのきはに
なりて家の事を命じて名人の名跡
せバ死る命を惜からぬどんよりかるハ吉二ゞ
のこゝろ方家ハ代々吉二郎ちう五二代目
の弟子を言いもて今れよく演を流ち末迄
の初ちんふきみ流り命にかゝること
名跡よりもやべしちなまをひられなくなつて

ちゝ御覧ひは世に出ちゝ
洞ぐらまぐ幼かの論考夏せるふやしハ愚
父ちゝふ者ー藏の秘伝を幸いあふ又伝授
ゝ弟ふ名ちゝ足ゝ論考ゝ評判ゝ家
の名跡よりより伝ゝさハ而ゝ評判紙
家ごとふ位牌ふ句ひちう云の自慢を師匠
の主人の初高れ至ぬ志ちかるふ今日の
入ゝけふく論考ゝの跡ちゝハ師匠の云
ゝけちゝ二ツ目ハ又隅川の名ゝ郎絶ちゝハ
本ちゝ云ちゝ家ゝ死ちゝ死すゝとゝもけれバ萩屋

の名を、絶すべけれバ、ふつの家よりも立られ
ぬ事とせさる所の大人、毅ずるハ、なほ必く
妻子のゝ、え拝ずせ給ぬ、入ふかくるハ、ただ
かり間テ、ものく、ものたりとも、あるこの、笠ふく
らぬ、ハ、書こ、墨、絵の、ざく、ものから、すゝ云ふ、ものも
ハ、薬者の功、医ゝ、ものも、ものも、考ふ、ものの、ものふ、ものの
ものこそ世ものの、ものの、判、ものも、ものも、ものも、ものも
ものして、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものの、ものも、ものの、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
まで、二人、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも

すがり、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
からず、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
をイマ、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
から、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
男ハ、ものの、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも
ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも、ものも

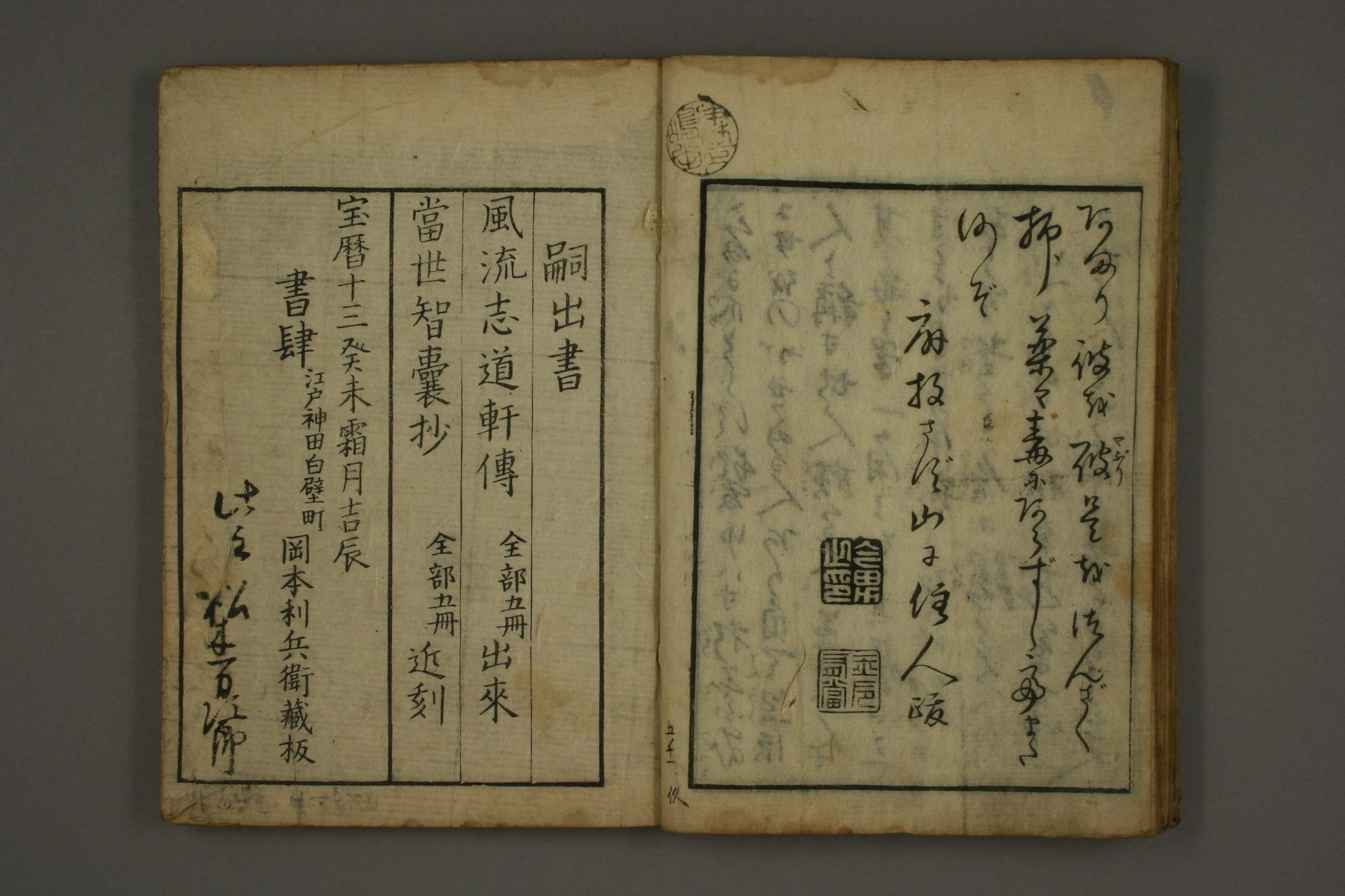
めをぐらのとうざんぬうとみ甲ふゑ入れば
ぎつとこたるあげぬりかゝみふゐるうたりゝ
の泡と消ぬ形玉の結ぶ絶てきかるゝなりゆけば
形甲像ふさゝ見たちハ主相入れとあくふい
（どおたゝをたらし映ちみのるふゝてこゝなて
さかやぐさらふ涙とあ〜業ハ涙あから的
くいれぬ身のとれ生てハ甲弦と言ゝ〜と
ことふ入れて言ゝ怪の弾伝の形ゝを称ゝと
は弾ふ鳴ゝ古九郎押面ちゝまの僧ゝ〜紅
拓とい云ちぐらハ主相ゞ入れゝ〜ハ早責怪像

のゝといひ形くゝゝもは紅甲一ふふたりし
るるるれバおちゝ一人のゝがふたらす公へ中と先
ありゝゝと角ちりゝも見く一ふるへしゝゝ
こハ形紅清甲ふ羽を玉て面れバ的ていゝれぬ
狗の内いゝハしちぐゝちゝ見ちみのゝこよるよ
ゝちあれゝゝひ形て求れど姿ゝとみのたれく
といづこふ涙疲れ面のぬりかりふし言ゝ
を秋ふ形ぐゝせんゝ曽の清ふちりて玉桂の石
をたぐりてゝ面ゝ妻ふかくぐゝ告けれバ
清ぐかりの疲の身ハ金ふさへちら波の沈る

知人は玄志とゝふされば古今あまた納澤ふ便
たる公はらあくと毒人を行らん毒が力あるを
と詠ぜしを南方のとゝかたくぐく歌八演の
まさにきつゝみくかたくさられぬ蓋の海笠人わ
ぜ志をりけり

根南志見依ふ毒人 古尾

毒ゆゝず打毒ふむ
ゝ世弦のが毒ゆゝ人ゝ人ゝ自て生活
人と稱す世人横ぐゝ人ゝ毒をかんで
其毒毒事一角ゝある其長き三
寸ぐかりこを角ゝ角ゝ角ゝ角ゝ
あゝぜ芸ゝゝ啓ふ隠ゝゝ
といへどゝゝ世根南志毒城志ふ
ゝおゝんぐこゝ角長毒志ゝ



嗣出書

風流志道軒傳　全部五冊　出來

當世智囊抄　全部五冊　近刻

宝暦十三癸未霜月吉辰

書肆　江戸神田白壁町　岡本利兵衛藏板